

政治外交推薦書

2023年

6月25日

発行者 矢木信男

書名 「日本陸海軍 失敗の研究」歴史街道編集部 PHP 新書

発行日 2021/7/29

- 1 推薦理由—日本の陸軍と海軍の敗戦の原因は、今の日本の官僚における課題と同じではないかとも思える。これは、日本人の特性の一つかもしれないが、それが日本の政治や経済などあらゆる分野に共通する課題でもあると類推される内容の書である。本書は日本人論でもある。
- 2 キーセンテンス
 - (1) **2・26事件（1936年）は陸軍に大きな影響を与えた。どんな影響か？** 肅軍（＝しゅくぐん・軍の規律を厳正にすること）人事の名の下に、皇道派とこの派に関係のあると見られた者は要路からはずされた。肅軍の改革で、陸軍は命令と服従を絶対とし、妥協や調和を揮する、直情的に事態に対する軍人こそが生き残れる、というよりも偏狭な集団と化したのである。
 - (2) **こうした中で重んじられたのは誰であったか？** 東條英機のようなタイプであった。東條はこの事件に際して、断固たる態度を示したことを評価され、陸軍内での序列が予備役とされる前だったのに、一気に指導部に近づくことになった。陸軍の体質を変えさせたという点で2・26事件は罪深いといえる。
 - (3) **日本の陸軍は初めからおかしかったわけではない。いつからおかしくなったのか？** 明治時代の陸軍には、山縣有朋（やまがたありとも）や児玉源太郎（こだまげんたろう）が指導者を形成し、「軍事と政治との関係」ではバランスが良かった。彼らを第一世代とするなら、第二世代は、大正から昭和初期までの田中義一（たなかぎいち）、上原勇作（うえはらゆうさく）、宇垣一成（うがきかずなり）たちであろう。彼らは「何でも軍事で解決する」といった意識が薄く、政治とのバランスをとっていた。この伝統が、昭和の陸軍を動かした第三世代で途切れた。第三世代の正統に位置する永田鉄山は、第一、第二世代の意識を継ぐ人物といえた。彼が指導部に座っていたならば、昭和の陸軍はものわりのいい軍隊になっていただろう。しかし、昭和10年（1935年）8月、永田は軍務局長のときに殺された。そして、彼の死後、軍部指導者たちが、日中戦争から太平洋戦争に至るまで、主体的な役割を果たしたのである。
 - (4) **第三世代は第一、第二世代の良き伝統を、なぜ受け継がなかったのか？** 第一に、第一次世界大戦で戦争の形態が変わったことだ。これで、戦争が戦場に限定されず、国家全体として戦わなければならなくなった。これで第三世代は、「安政の老人たちに何がわかる」という台詞を口にし、第一、第二世代を否定した。つまり、彼らの戦争は「古い」として、捨ててしまった。もう一つは、長州閥が陸軍を支配していたことだ。永田鉄山、岡村寧次（おかむらやすじ）、小畑敏四郎の3人がドイツのバーデン・バーデンに集まり、軍の組織改革を話し合った。そこで長州閥による支配にピリオドを打ち、能力のある人が出世できる組織に変える。そのためには、陸軍大学校卒業時の成績を持って、能力を客観的に評価する物差しとした。
 - (5) **東條英機とはどんな人物であったか？ 永田鉄山とどのように違っていったか？** 国家総力戦に関して、永田鉄山は、大蔵省などの役人と勉強会を開き、戦争は軍人が闘うだけでなく、官僚

の役割を必要とするという広い視野をもっていたからだ。それに比べて、東條英機はそのような勉強会をつくった形跡がない。「戦争は軍人がやるのだから、国民は我々の言うことを聞いていればいい」というのが、彼の考え方で視野が狭かった。それだけでなく、「自分の都合のいい情報」を見たがる傾向があった。彼は耳障りのいい情報に接することで、自身の不安を鎮めたのであろう。例えば、「アメリカの軍人は、勤務時間が終わったら、上官を呼び捨てにする」などだ。その後、彼がアメリカの戦力を軽視した面は否めない。東條についてはもう一つ、問題がある。客観的事実から日本側を不利と分析した軍人を「弱腰」と見なし、陸軍の省部から遠ざけた。

- (6) **どんな例があるか？** 昭和13年(1938年)からアメリカの駐在武官を務めた山内正文(やまうちまさふみ)は、「アメリカは最終的に敵にしないほうがいい」という報告書を何度も送るが、敗北主義者として更迭されている。また、昭和12年(1937年)、7月盧溝橋事件(ろこうきょうじけん)が起こった後、「戦争不拡張論」を主張する陸軍軍人は大勢いた。だが、彼らも東條によって省部から遠ざけられた。都合のよい情報を重んじ、理性的に判断をする軍人を省部から遠ざけるような人事をしたことは、陸軍の深刻な問題といえるだろう。
- (7) **なぜ、陸軍にとって深刻な問題となったのか？** まともな意見が通らないのは、組織が硬直化しているからである。硬直化した組織は、議論がなく、上からの命令を下の者が聞くだけになり、活力を失うのだ。もちろん、軍は議論の場ではなく、上の命令に下が従うのは当然である。しかし、昭和の陸軍は、縦の関係があまりにも強すぎた。上下関係では、参謀本部では作戦部が1番、情報部が2番という具合に部署の序列があった。これは陸軍大学校の成績順で配置先が決まったからで、作戦部は、陸軍大学校を1番から5番で卒業した者、情報部は6番から下の者が配置される内規があった。
- (8) **上位5人だけが入れる作戦部は、強烈なエリート意識をもっていた。それゆえに情報部が色々な情報をあげても、無視することがあった。なぜか？** これは情報の参謀だった堀栄三が語ってくれたことだが、「われわれが情報をあげても、作戦参謀が聞かない。なぜかと尋ねたら、情報とはわれわれの作戦のための情報であり、情報があつて作戦を考えるのではないと答えた」と言う。要するに、「自分より成績の悪い者が集めてきた情報に振り回されて、戦争をやったら大変だ。自分たちの考えでやらなければならない」ということだ。
- (9) **このように実践した結果、どうなったか？** 兵站(へいたん=ロジスティクス)がおろそかにされ、兵隊の食料を現地調達する羽目になったり、制海権、制空権を失い、食料が届かずに餓死する事態が生じた。軍という組織は上の命令に下が従う。それだけに命令する側は情報をきちんと把握し、分析し、決定しなければならない。この点で昭和の陸軍はいい加減であった。
- (10) **昭和の陸軍にマイナスが目立つことは確かだが、一方で、バランスよく考えられる軍人がいたことを見落としてはいけない。どんな人物か？** 将官クラスでは、第14軍司令官としてフィリピン攻略戦を指揮した本間雅晴(ほんままさはる)、小笠原兵团長として硫黄島の守備を任された栗林忠道(くりばやしただみち)、第八方面軍司令官としてラバウルを守り続けた今村均(いまむらひとし)の名前が挙げられる。だが、その見識が中央レベルで生かされなかった

ことは、昭和の陸軍の欠陥といえる。

- (11) **彼らのような軍人を、「良識派」と呼んでいるが、そこに共通するものは何か？** 今村と本間はイギリス、栗林はアメリカに赴任したことがある。 必ずしも駐在武官の経験が重要だとはいえないものの、外国に出て見聞を広めた人と、そうでない人の差は大きいはずだ。 もう一つ、本をよく読み、ものの見方・考え方ができていたところが共通しているように思う。これは誰もが経験することだが、本を読んでいると、自然に頭のなかでシミュレーションして、想像する力、分析する力が養われるのではないだろうか。
- (12) **昭和の陸軍を調べてつくづく思うのは、国民一人一人が軍事を勉強しなければいけないという当たり前のことだ。なぜか？** 国家は政治と軍事の2本柱で成り立っているからだ。 外交で話がつかなければ、最後の可能性として戦争が存在する。戦争はないほうがいいのは当たり前だが、軍事のメカニズムと怖さは、知っておく必要があるはずだ。 「日本は戦争を放棄したのだから」「軍事なんか考えたくない」などと言っても、軍事から目をそらすのは、ある意味で無責任な態度ではないか。
- (13) **陸軍のインテリジェンスで最も特筆すべきは、その通信傍受能力である。担当していたのは、参謀本部特種情報部であり、戦争末期には1000人もの人員を投入していた。その内実はどうであったか？** 特種情報部（特情部）は、米国IBM社製の統計機を利用して、中、米、英、ソ、仏、独の外交暗号の一部、中、米、英、ソの軍事暗号の一部を解読していた。特に米国のストリップ暗号は解読が困難で、日本海軍や外務省もこれが解けなかったが、陸軍だけはこの暗号を解読することができたようである。 ただし、すべての暗号を数学的な理論解読のみに頼っていたわけではない。在日米英の領事館に潜入して暗号を盗んだという方法である。
- (14) **米軍のストリップ暗号を陸軍は解くことが出来たが、海軍にはできなかった。そこで海軍は米軍の暗号が解けないまま、戦わざるを得ない状況に陥る。しかも陸軍は、ストリップ暗号を解読していた事実すら海軍に伏せていたのである。なぜか？** 海軍は陸軍に対して同暗号の解読方法を知らせるように求めたが、陸軍の回答は、「解読方法は陸軍の機密につき不可」というものであった。 この事実だけを示せば、陸軍が一方的に海軍に情報を隠しているような印象であるが、海軍の方も陸軍とは、基本的に情報を共有しようとはしなかったのである。
- (15) **具体的にはどのようなことがあったか？** 1944年10月、台湾沖航空戦において、日本海軍は、大敗を喫したのだが、大本営発表は、「米空母11隻を撃沈（実際は撃沈はゼロ）」というものであった。海軍軍令部の情報部では、一隻も撃沈できなかった事実を把握していたが、「士気にかかわる」として事実を、伏せられたのである。 その結果、陸軍は大本営発表を信じ、梅津美治郎（うめづよしじろう）参謀総長が「戦勝気分を絶対に戒め」と発言する有様であった。さらに、陸軍は米空母が壊滅したのであれば、フィリピンは日本軍の制空権下になったものと信じ、ルソン島での防御戦から急ぎよ、レイテ島での攻勢作戦を開始したのである。
- (16) **この結果は、どうなったか？** 現実は米軍の制空権下の作戦となり、レイテ決戦は惨憺（さんたん）たる結果となった。 この結果に有末情報部長は、「大本営陸軍部には何ら情報を伝えず（中略）陸海軍作戦部間の連絡不十分なことが作戦上重大な過誤を犯して戦勢挽回の好機を逸

したことは、返す返すも遺憾」と、海軍の不满をぶちまけたのであった。

- (17) **上記のように陸海軍や参謀本部内で、情報は縦割りの壁を乗り越えて伝えられることはなかった。何を意味しているのか？** 米国マサチューセッツ工科大学のリチャード・サミュエルズ教授によると、**戦前の日本のインテリジェンス組織は、最後まで（そして今も）、縦割りの弊害を克服することができず、これが致命的になった**と言う。（リチャード・サミュエルズ『特務』）
- (18) **なぜ、縦割りがとられたのか？** **軍隊や官僚組織は軍事作戦や行政事務の遂行上、縦割りが最も効率が良いのも事実である。** 参謀本部における作戦部と情報部の対立は、当時のセクションナリズムを如実に示す事例でもある。**これは陸軍に限らず現在の日本でもよく聞かれる**ように、国よりも省、省よりも局、局よりも課、といった縦割りに由来するものだ。
- (19) **情報の領域はやや特殊で、情報は組織を越えて水平的に共有されることが理想である。なぜか？** **あるセクションにとって価値のない情報が、他のセクションには死活的なものになる場合があるため、情報は組織の中である程度共有できることが、その活用に必要なのである。** そのため、欧米の軍隊組織や情報機関は、なんとか情報共有や集約の仕組みを制度として担保している。しかしながら、**昭和の陸軍には、そのような意識はまったく希薄であった。** もし陸軍が海軍に有益な情報を得ても、それが海軍に伝えられることはほぼ、なかった。
- (20) **そもそも海軍はいかにして誕生したのか？** **昭和の頃の海軍はとても小さかった。軍艦にしてもほとんど輸入していた。また日清戦争直前まで陸軍の指揮下に入るという制度であった。** 明治26年に参謀本部から海軍軍令部が独立し、日清戦争、日露戦争を戦うが小さな海軍であった。**大きな転換点は明治37年（1904年）に起こった日露戦争である。国力が20倍ほども違うロシアを相手にし、日本は勝った。** とりわけ日本海海戦の勝利はめざましいものだった。
- (21) **なぜ海軍、特に昭和の海軍は慢心が蔓延したのか？** **米英の艦隊と戦えるような日本の軍艦が出てくると、当然、相手は逃げる。それが繰り返されるうちに若い士官など「無敵意識」が醸成され実体のない慢心が海軍の軍人に蔓延してしまう。そこに輪をかけたのが、兵器の開発である。** 昭和6年（1931年）に91式徹甲弾という大口径砲（だいこうけいほう）の高性能の砲弾が発明され、その2年後には93式魚雷という酸素魚雷が完成する。技術的に「画期的な兵器」を手に入れたことは「アメリカ何するものぞ」という気持ちが醸成される一因となった。
- (22) **なぜ、日本は空母の建造に力を入れたか？** **昭和の連合艦隊で古い戦艦が多かったのは、軍縮条約によって戦艦の建造が抑制されていたためである。ここで、日本は「戦艦がダメなら空母に期待しよう」と方針を切り替え、積極的に空母を建造した。** このことは、空母機動部隊だけで作戦を遂行するという、**先端的な戦術モデルを世界で最初につくることになる。** その意味で**日本は世界の先陣を切って、航空重視へ移行した国**でもあった。
- (23) **日本の陸海軍の指揮系統はどうなっていたか？** **指揮系統はシンプルであった。軍隊の最上位は天皇であり、以下階級順で命令が伝達される。** 階級の上の者が下の者を指揮し、同じ階級だった場合は、前任者、つまり海軍ならば士官名簿で上の者が下の者を指揮する。逆に、自

分より上の階級、自分の先任者は指揮できない。

- (24) この指揮系統の問題点は何か？ これが過度なほどに厳密に運営されたため、人事上で障害をもたらした。そもそも日本人の性格上、抜擢はあまり喜ばれない面がある。だから、日本の海軍は兵学校卒業が同期の人間は階級を3つ以上離さなかった。日本の制度は硬直化していて、状況の変わる戦場をフォローするだけのフレキシビリティがなかった。 その点、アメリカ海軍には、「配置階級」とでもいうような制度があり、艦隊長官を命じられると大将になり、辞めると元の階級に戻る。 そういうフレキシブルな体制が日本では実現せず、平時のままの制度で戦時を押し切ったことは、多大な弊害をもたらしたといえよう。
- (25) 海軍の技術力は凄まじいスピードで成長を遂げた。明治から技術導入を始めて60年で、世界一の戦艦大和をつくるまでになった。飛行機も零戦、96陸攻という世界水準のものを作りだした。足かけ4年アメリカと互角に戦った。これは驚異的な進歩である。なぜ、このような進歩を遂げることができたのか？ 明治時代、海軍はエンジニア教育にも重点をおいていた。エンジニアとしての知識もなければ、海軍の指揮ができないからだ。 したがって兵学校は、数学をはじめ工業学校のような科目がたくさんあった。これが昭和に入ると、カリキュラムの中に精神教育が増える。明治の海軍は現実的で冷静だったが、昭和になってから、精神主義的な組織になっていった要因の一つである。 また、海軍は完璧主義のところがあり、少しでもいいものを追求し、次々に改良を加えていった。
- (26) 海軍での技術において、決定的な問題点は何か？ 兵器を要求する側の「どのように使うのか」「何のために作るのか」と言うコンセプトが曖昧なことである。 それには、戦争経験の少ないことが影響したと思われる。
- (27) もともと日本海軍の戦い方とは？ 防衛戦を元に考えられていた。 敵艦隊がマレーシア、マリアナ、小笠原などの近海に来たら迎え撃つ。これが帝国国防方針に定められていた海軍の基本的な戦い方だった。太平洋戦争が始まる前まで、海軍には艦隊随伴の高速タンカー（給油艦）がほとんどなかった。
- (28) 1942（昭和17）年5月7日～8日からアメリカ・オーストラリア連合軍の機動部隊と、瑞鶴（ずいかく）、翔鶴（しょうかく）、祥鳳（しょうほう）を擁する日本の機動部隊との間で、世界初の空母戦が繰り広げられた。この戦いを何というか？ これが珊瑚海海戦である。 開戦当初の真珠湾作戦、インド洋作戦が順調に進むと、昭和17年に第二段作戦が始められた。その1つがMO作戦である。これは、アメリカとオーストラリアの連絡路を遮断することを目的としており、ニューギニア南東部のポートモレスビーを攻略し、珊瑚海の制海権を確保するというものであった。 第四艦隊司令長官の井上成美が指揮官となった。2日にわたる戦闘の末、双方が撤退して海戦は終わったが、ポートモレスビー攻略の作戦目的を達成できなかったのだから、大局的には日本は負けと言える。また、真珠湾作戦以降、連戦連勝だった日本の勢いが止まったという意味でも、日本にとって痛手であった。MO作戦の失敗は、ポートモレスビー攻略を軽く見ていたことが要因として大きい。
- (29) 珊瑚海海戦で、日本軍の問題となった点は何か？ それは偵察の問題である。 この海戦後

に作った戦訓調査報告書は「偵察機搭乗員の未熟」という認識で結論づけた。ここで、さらなる問題は、戦訓調査報告が「偵察をどうやったらいいか」というところまで踏み込んでいなかった。一方、アメリカは偵察をより重視することになる。参謀だった中島親孝（ちかたか）氏が戦後調べたところでは、台風が来て「飛行機を飛ばしたら、戻れない」という場合でも、偵察機を出し、殉死するパイロットが出たという。それくらい偵察は徹底的にやっていた。この相違は日米の「情報」に対する姿勢の違いから来ているかもしれない。アメリカの情報収集にかける執念は、すごいものがある。

- (30) **日本側は、海上航空兵力と陸上航空兵力の連携が出来ていなかったのである。つまり、「珊瑚海海戦を研究して、次の作戦の参考にしよう」という意識が日本海軍には欠けていたのだ。なぜ日本海軍は珊瑚海海戦から学ばなかったのか？** 大きな要因と思われるのは、MO 作戦の不首尾を指揮官の井上成美に帰したことである。「井上は戦場の指揮官に適していなかったから、この作戦に関してはしようがない」というふうに見られて、「珊瑚海海戦は、さほど勉強するに値しない」という認識をもっていた節がうかがえるのである。連合艦隊の参謀が、第四艦隊から電報に赤鉛筆で、「バカヤロー」とか「へたくそ」と書いてあったという。井上に対する指令部の評価を物語っている。
- (31) **珊瑚海海戦の失敗に学んでおけば、ミッドウェー海戦の結果が違っていた可能性がある。どういうことか？** 戦争初期の順調さが影響して、「いけば勝つ」と、軍人が刷り込まれ、「敵は弱い」という認識しか持てなかったところに、日本海軍の弱さがあつたと思う。珊瑚海海戦は、未経験の戦闘であるだけに、戦訓を抽出する絶好の機会でもあつた。まず、空母戦はスピードが重要であること。上にお伺いを立てていたら、間に合わないのだ。したがって、現場で判断し、行動できる体制が必要になる。実際、アメリカは珊瑚海海戦後、現場の権限を強化している。一方、日本は中途半端な権限しか現場に与えられず、連合艦隊司令部や上部艦隊司令部にお伺いを立てる体制が続いたのである。これらのことが、ミッドウェー海戦に活かされなかった。
- (32) **マリアナ沖海戦とは？** 昭和17年（1942年）6月のミッドウェー海戦以降、勝ち目のない戦闘が続くなかで、サイパンを押さえれば、トラック島にあるラバウルの航空基地を強化することも可能になる。それによって、再び米豪遮断を試み、ソロモン、オーストラリア方面の戦略を回復・維持するという。これができれば、米軍の本格的反攻を抑制し、対米戦争を仕切り直せるというわけである。新造の空母・大鳳（たいほう）、翔鶴、瑞鶴などを軸とした機動部隊の再編成、さらに残された陸上の飛行機を含めて、全体として航空兵力に重点を置き、「あ号作戦」が策定された。この作戦が発動されサイパン制圧に動き、アメリカ軍との間で起こった「絶対国防圏の死守」という点を踏まえれば、マリアナ沖海戦は、「最後の決戦」とも位置づけられる。
- (33) **なぜ、マリアナ沖海戦（昭和19年・1944年）で日本は負けたのか？** 最大の敗因は、アウトレンジ戦法にある。アウトレンジ戦術とは、航続力の大きな飛行機を使って、敵の攻撃範囲の外側から先制攻撃をしかけることにより、味方部隊が損害を被らずに有利な戦闘を行う

というものだ。アメリカの飛行機よりも2倍の距離を飛べるとしても、長距離を飛んだ搭乗員はくたびれ果て、敵の空母から上がったばかりの、鋭気に満ちた戦闘機搭乗員とぶつかることになる。真珠湾攻撃やミッドウェー海戦の頃より力が劣る搭乗員に、この困難な作戦を要求したのには無理があった。しかも、アメリカ軍には空母でレーダーを見ながら、上空哨戒の飛行機を無線でコントロールするシステムがほぼ完備されていたため、日本海軍のほとんどの飛行場は、アメリカ艦隊を見ないうちに、撃墜されてしまった。

(34) **第二の敗因とは？** それは、日本が攻撃に力を入れすぎたことである。重要なミッドウェー海戦の教訓が取り入れられていなかった。それは「偵察」である。相手を完全に把握しなければ、戦闘は成り立たない。保有する飛行機の半分を偵察にあてて、敵の動きを確実につかみ、残りの半分で攻撃するくらいでもいい。しかし、空母は偵察用に半分の飛行機を使うことを嫌い、ほとんどは周りの軍艦の水上機に任せていた。だが、偵察を終えた水上機を収容するには、艦を停止しなければならず、戦地では、収容が出来ない場合もある。そのため、偵察機には陸上基地に行くように命令される例も多かった。偵察を軽視するのは日本の悪いところであるが、それは、攻撃に重きを置きすぎるからである。

(35) **第三の敗因とは？** 潜水艦に対する危機意識の低さが挙げられる。潜水艦に対しては乗務員は全員、海を見て潜水艦を警戒する必要がある。ところが日本海軍は、空母から攻撃隊が出るとき、総員で見送り、飛行機に向かって手を振る習慣があった。アメリカの潜水艦は、魚雷射程距離が短く4000m～8000mくらいであり、時として1000m以下まで接近して撃つため、真剣に監視していれば発見できる可能性は十分にある。また魚雷回避には、空母の両側に駆逐艦を置いて警戒させるという戦術があっただけでいいはずだが、それも十分ではなかった。

(36) **日米戦争で決着がついたという戦いは？** それはマリアナ沖海戦である。日米戦争の決着がついたと言っても過言ではない。太平洋戦争の損害の過半は、マリアナ沖海戦以降に生じている。ここで、戦争をやめていれば、特攻も原爆投下もなかった。日本の政府と軍部に負けを認める勇気がなかったことは、戦争の悲劇を大きくしたといっていい。

(37) **大和も零戦も結果として素晴らしいものを生み出しながら、十分に使いこなせなかった。なぜか？** 今日、われわれが教訓とすべきはこれらが素晴らしいものであったが、「どのような状況で、何のために使うのか？」を徹底して考え抜かなかつたために十分に使いこなせなかったことだ。逆に言えば、高性能であればあるほど、使う側に能力が求められるということになる。日本は現場よりも指導部に大きな弱点があった。「史上最大の戦艦とバランスのとれた万能戦闘機をつくりながら、頭の中は明治維新」、こうしたギャップが大和と零戦の悲劇を生み出した。

(38) **最初の特攻隊とは？** レイテ海戦で結成されたのが、「神風特別攻撃隊」である。「特攻隊」の発祥は、日本ではなく、フィリピンであった。そして、最初の特攻隊が、敷島隊（しきしまたい）であった。その一人が谷暢夫（たにのぶお）であった。彼は辞世に「身は軽く、務（つとめ）重きを思ふとき、今は敵艦に、ただ体当たり」と。<何一つ親孝行できなかった私も、最初で最後の親孝行をします。この両親の長命を切に祈ります>。若き兵士たちが遺書のなか

で多用したのが、「親孝行」の文字であった。国を護ることは故郷を護ることであり、それは最愛の家族を護ることと同義であった。

- (39) 「終戦の歴史から私たちは何を学べるのか」という問いに対して、まず歴史を学ぶ際に、2つの視点がある。その2つの視点とは何か？ 一つは「歴史の視点」と「同時代の視点」の両方に目くばりが必要である。「同時代の視点」で見ることが多くなりがちだが、ある時代だけを切り離して捉えると、流れが見えなくなり、歴史から学ぶことができない。「歴史の視点」で見ることが極めて重要である。
- (40) では、「歴史の視点」で見ると、何がわかるのか？ それは「政治と軍事が連携する知恵」がなかったことである。明治時代の日清戦争のときは、陸軍のトップであった山縣有朋は、「われわれは戦うが、限界がある。終戦にもっていくよう、政治が考えてくれ」と言った。日露戦争では、伊藤博文が金子堅太郎をアメリカに送り込み、和平の機会をうかがって働きかけた。しかし、昭和においては、それが全く働かなかった。
- (41) なぜ、昭和の軍部は政治と連携できなかったのか？ 明治期のような黎明期には、個人と個人の関係で難局に向き合い、互いに連携し合うことができた。しかし昭和に入ると、組織対組織という側面から強くなり、個人なら話がつくことでも対立する組織の間では、面子が先走り、協調ができなかったと思われる。その意味では昭和の軍人や政治家たちに対し、「先人の知恵を、どうして受け継がなかったのか」と、批判的にならざるをえない。もう一つ、「歴史の視点」から挙げておきたいのは、「日本の軍事学」がなかったことだ。江戸時代260年間、日本は国家として戦争しなかった。日本は明治になって、国家的戦争に勝利したプロイセンの組織と精神を模倣する形で明治15年から軍事学をつくった。それは直輸入であり、日本に適した軍事学というものを考えなかったのである。例えばプロイセン軍は皇帝のための軍隊であり、皇帝を守るのが軍事学の基本となる。それを日本は受け入れて「天皇の軍隊」と規定したのである。
- (42) 日本にも、軍事学をつくらうとした者はいた。誰か？ 石原莞爾(かんじ)はそのうちの一人だが、結局、日本にオリジナルの軍事学が樹立されることはなかった。日本の文化、伝統、日本人の精神的作用としての軍事学に基づいて戦って敗れたならば、それは致し方ない面もある。しかし、昭和の戦争は、そうではなかったのであり、日本人は今後も、「日本の軍事学」をどうすべきかを考えていくべきだろう。
- (43) 一方、「同時代の視点」で考えると、人事の問題が指摘できる。具体的に言えばどういうことか？ 例えば、太平洋戦争期間中、東條英機は首相で、陸相を兼ね、最後は参謀総長も兼任した。一人の軍人が3つもの権力を握らなければならないほど、日本に有能な軍人はいなかったか。決してそうではない。アメリカ駐在武官の山内正文、磯田三郎、イギリス駐在武官だった辰巳栄一などがいた。彼らは「アメリカと戦ってはいけない」と言い、反対し続けたが、「弱虫」「度胸がない」とマイナス評価がなされた。そのような人材がそしられる空気を作り上げたことは、昭和の軍事組織の最も悪いところである。また、特に陸軍の人事において、2・26事件の影響を無視できない。中央から外されたり、軍を追われた有能な軍人には、皇道派が少

なくなかった。このように「終戦」の歴史を見ることで様々な問題が浮かび上がり、それを考察することは、日本の近代史を理解することにつながるし、軍事と政治の関係を考える有力な視点にもなるし、これからの日本を考える糧にもなるのである。